

# 市民文芸

## 短歌

令和元年  
阿南市春季短歌誌上大会選

- 佳作 穴明きのジーンズはきし孫若し<sup>かすり</sup>緋モンペの我の青春  
米田 啓子
- 佳作 幾万の花屑踏んで山登る峰の社は朝靄の中  
原 美智子
- 佳作 流れゆく春愁抱き花筏山鳩の声山路につづく  
矢野 道子
- 佳作 逃れざる齡となれど花だより尋ね聴きにつ桜恋ふ日は  
横山みつ枝
- 佳作 稜線の茜に浮かぶ夕つ方美声はりあげ選挙カ一の来る  
小西 千恵
- 佳作 品種変へ育つ稚苗のみづみづと元肥撒きて春耕を待つ  
西崎まき子
- 佳作 似合うだろポーズをとりて夫は着る亡兄の遺せし服を出しきて  
山本 賀代
- 佳作 轟が円かに聞こゆ春雷に濃き夕闇もゆるくほどける  
水口 明美
- 佳作 藁立ちの力抑へて白菜のまるき形に遅き霜降る  
中原きみ子
- 佳作 街川のゴミの溜りに流れつき散る花片は逃げ場を探す  
小畑 定弘

## 俳句

阿南市俳句連合会選

- 白壁の土蔵眩しき夏の雲  
東條 明宏
- 戦中に生れ戦争を知らず夏  
山野 賢治
- 向き会える正面いつこ西瓜切る  
笹田 知睦
- 飛びたつも潜むもまねて稲雀  
中野 郁
- 暑に籠り魂しい抜けしよう眠る  
竹谷 由美
- 時化る海轟音やまず夏岬  
藤本 弘子
- 頃合の鱧とは捌きやすかりし  
宮崎三千代
- 一球の重みに涙秋立ちぬ  
多田紀久代
- 落ちそいで落ちぬ丸茄子三個盛  
山田 百代
- 大花火に耳栓欲しいと泣きし子よ  
芳田 悦子
- 川柳  
阿南川柳会 田上 鶴子選
- 人の世はすべてが師なり草も木も  
西田 修身
- 真心を包む田舎の新聞紙  
原 公美子
- 追及へさりと釘を刺しておく  
渡邊 浪漫

ロボット先生就任の日も秒読みに  
砂浜は亀の<sup>ふか</sup>孵化まで託される  
淡々と過ぎる一日お蔭さま

佐藤つたえ  
高木 旬笑  
田上 鶴子

### 一般応募

米に泣き米に笑える今の幸  
目も耳も齒にも他人の住む八十路  
姉も逝きおまけ人生ひとり旅  
今思う厚い冊子が教師です

鳥尾美津子  
武田 敏子  
仁井 信子  
吉田 當代

## 漢詩

阿南漢詩研究会・青松吟社選

### 新秋夜坐

節入新秋詩思清  
雨餘頓覺早涼生  
獨坐推敲明月句  
墜露多邊蟋蟀鳴

節は 新秋に入り 詩思清し  
雨余 頓に覚ゆ 早涼の生ずるを  
独坐 推敲す 明月の句  
墜露 多き辺り 蟋蟀 鳴く

池田 行子

### 新秋即事

秋動郊墟小雨餘  
金風玉露野人居  
半簾兔影入箋夜  
一片詩情得句初

秋動く郊墟 小雨の余  
金風玉露 野人の居  
半簾の兔影 箋に入るの夜  
一片の詩情 句を得るの初

谷口田鶴子

### 賞月

杳渺長天坐夜闌  
澄心到底正無端  
水輪兔影輝千里  
歎賞幾人何處看

杳渺たる長天 夜闌に坐せば  
澄心 到底 正に端無し  
水輪 兔影 千里に輝き  
歎賞 幾人 何れの処にか看ん

折野 博子

※到底：徹底 ※無端：無限